



Title	日本語における「無」の意味についての再考： 「無」ではじまる二字漢語とその反義関係に基づいて
Author(s)	チャン, クォック ヒエップ
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 84-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語における「無」の意味についての再考 —「無」ではじまる二字漢語とその反義関係に基づいて—

チャン クォック ヒエップ

1. はじめに

一般的に考えれば、「無」は「ない、存在しない」を意味し、「有」は「ある、存在する」を意味する。このように、「無」ではじまる二字漢語は、語基が「有」と結合すると、反義関係を持っている反義語を構成できると考えられる。(1a,b)に挙げた「無塩 - 有塩」、「無能 - 有能」のような語が、語基が表す存在の有無からなる反義語の代表である。

- (1) a. 無塩バターの方が有塩のよりスッキリした味になるような気がしますね。
b. 弁護士としては無能だが、服装だけはいかにも有能な弁護士ふうだ。
- (2) a. 我が国は世界有数の地震多発地帯に位置しており、有史以来、無数の地震被害を経験している。
b. 欲は自分のために自分が目立つことを意味し、この意味では無欲がいい。

(現代日本語書き言葉均衡コーパス)

だが、(2a)で挙げた「有数 - 無数」は反義語のペアであるが、「有数」が「少ない」、「無数」が「多い」を意味しているように、語基「数」の存在の有無による対立ではない。「無数」は「何もない」という意味ではなく、「非常に多い」という意味が発生していることから、「無数」と「有数」の対立関係は「有・無」の対立ではなく、「多・少」の対立によって成立している。それは「数」といえば、我々が「数がある、数がない」とは言わず、「数が多い、数が少ない」ということが影響しているからとも考えられる。また、(2b)では「欲 - 無欲」が反義語のペアであり、「無欲」の反義語となりうる「有欲」は存在しない。「欲がない」は「無欲」と言い換えられるが、なぜ「欲がある」は「有欲」と言い換えられないのであろうか。それは「人間には欲がある」という状態を前提とし、「有」が付かなくても「欲」は自ら「ある」状態を示せるからと考えられる。このように、反義語と対照することで、「無」ではじまる二字漢語を洞察することができると思われる。本稿は、「無」ではじまる二字漢語とその反義語の考察を通じて、反義関係に置かれる「無」ではじまる二字漢語、そして日本語における「無」の意味、特に「存在」とのつながりを再考することを目的としている。

2. 先行研究

須山(1974)は「無」を語基の前に冠すると、結合形に否定あるいは反対の意味を付加することができるため、反義語を創り出す力が強いと述べている。また、「無」ではじまる漢語の反意を表す言葉・表現を追求することで、否定、反対、対立といった表現の諸相も理解できると指摘されている(須山 1974 : 19)。

表1 須山 (1974) 「無」ではじまる二字漢語の分類

タイプ	代表	反意の 言葉・表現	説明
語基が 単語になる	無欲 無論	欲がない 論じない	「(名詞) ～がない」「(動詞) ～しない」で対応される。
	無益 無罪	有益 有罪	「有-」で対応される。
語基が 単語にならない	無芸 無視	多芸 重視	「有-」ではなく、程度を表す 「多-」、「重-」などで対応される。
	無実 無数	無実ではない 無数ではない	対応する漢語がないため、 「～ではない」しか表さない。

須山 (1974) は表1のように、「無」ではじまる二字漢語とその反対の言葉・表現を提示し、そしてその反義関係を次のように分析した。一つ目は、「無欲」、「無論」など、「無」ではじまる二字漢語の多くは、そのまま「～がない」、「～しない」と言い換えられる。このタイプは「有」で対応する漢語が存在しなくても、「無」ではじまる二字漢語と反意の表現との間に、語基の物事の有無による対立が認められる。二つ目は、「無益 - 有益」、「無罪 - 有罪」のような「無」ではじまる二字漢語の反義語は、「有」ではじまる二字漢語だと思われる。須山 (1974) によれば、このようなペアは「有・無」の対立関係のように、反義語の観点でとられるべき性質のものと思われる。その際、語基の性質が積極・消極・中間のどれに該当するかは問題にならない。語基はその存在の「有・無」の対立に依存している。三つ目は、「無芸 - 多芸」、「無視 - 重視」のように、「有」以外の要素ではじまる二字漢語が対応している場合、全般的傾向として反義関係でとらえる。だが、その対立の内容は語基の性質によってさまざまであるが、「無勢 - 多勢」のような「多・少」の対立などが代表的な例である。つまり、この反義語のペアを分析するには、語基の性質を検討する必要があると考えられる。最後に、「無実」、「無数」のような漢語は、対立関係を拒否しているグループであり、この「無」をもった漢語には積極的・肯定的なものもあり、必ずしも否定的な意味を持っているとは言えない (須山 1974 : 25-26)。

須山 (1974) は、「無」ではじまる二字漢語の「無」の意味について、特に意味の反義関係に基づいて深く考察している。だが、本稿では須山 (1974) の指摘に、次のような3つの問題点があると考えられる。一つ目は、「無」ではじまる二字漢語の反義語に対して、「有」ではじまる語とそうではない語は、同じ反義関係として扱えるのであろうか。例を挙げると、「有罪 - 無罪」は確かに、「罪がある」か、「罪がない」かのどちらかの状態に注目している。一方で、第1節で述べたように、「欲がない」を言い換える場合、「無欲」と表現できるが、「欲がある」を言い換える場合、「有欲」と表現できない。「欲 - 無欲」などの心的世界に属して

いる概念に関しては、「有」の不使用と「無」の使用について妥当な説明が求められる。二つ目は、「多欲 - 無欲」、「食欲 - 無欲」のように、「欲」という語基は、存在の「有・無」と考えられる場合もあるが、その反面で「存在する」ことを前提とした「多・少」、そして「悪・良」の対立とも考えられる。なぜ、「無」ではじまる二字漢語の一部では、「有・無」に由来した対立が、量の多寡、そして評価の良し悪しにつながるのであろうか。三つ目は、「無数」は否定的な意味を持たないが、反義語がないと言えない。「有数」は「少ない」を意味し、完全に「無数」と反義になっている。このように、「無数 - 有数」の対立は、「有・無」ではなく、「多・少」だと言える。だが、この場合にはなぜ「無」が「少ない」ではなく、特別に「多い」を表すのであろうか。このように、須山(1974)は「無」ではじまる二字漢語を反義関係で考察したが、「無」の意味の豊かさを十分に説明できたわけではない。

3. 理論と考察

「無」は他の否定性を持っている要素と同じく、後ろの語基(便宜上、以下「X」という)と結合し、反義関係を作っている。

- (3) a. 不安 - 安心、不用 - 有用、不便 - 便利、不幸 - 幸福、不足 - 充足、不満 - 満足
b. 未婚 - 既婚、未刊 - 既刊、未知 - 既知、未満 - 満、未然 - 已然、未熟 - 成熟
c. 非常 - 平常、非凡 - 平凡、非番 - 当番、非業 - 業、非命 - 天命、非理 - 道理
- (4) a. 無為 - 有為、無塩 - 有塩、無毒 - 有毒、無給 - 有給、無人 - 有人、有料 - 無料
b. 無粋 - 粋、無芸 - 多芸、無視 - 重視、無学 - 博学、無謀 - 深謀、無味 - 好味

(北原、東郷 1989 : 355-422)

(3,4) は、「不、非、未、無」ではじまる二字漢語とその反義語である。Horn(1989)では、反義語の関係は、矛盾関係と反対関係に大きく分けられる。矛盾関係(Contradictory opposition)は、二項対立的で中間段階を持たないものであり、反対関係(Contrary opposition)は多項対立的で中間段階をもつものである(Horn 1989 : 268-273)。このように、(3a)の「不X」とその反義語は意味的に対立しているが、矛盾はしていない。なぜかという「不安ではないが、安心もしていない」という状態もあるからである。一方、(3b)の「未X」と(3c)の「非X」はそれぞれの反義語と意味的に矛盾しており、一方の状態が成立すれば、他方の状態が成立しない。しかし、(4)をみると、「無X」とその反義語との関係はより複雑である。(4a)のような場合、「有X」という形をとるため、「無」が「非」、「未」と同じく、矛盾関係を作っている。一方、(4b)のような場合、「有X」という形をとらないため、「不」と同じく、「無」が対立関係を作っている。このように、「無」ではじまる漢語とその反義語は、矛盾関係と、対立関係の両方を作っていると考えられる。第3節では、反義関係の理論を述べた上で、「無」ではじまる二字漢語の反義語を矛盾関係と対立関係に分けて考察する。

3.1 反義関係と反義語について

反義関係は、二語の間に共通する意味があり、特定の点において対立する場合に成立する。反義関係から成立するものは、反義語と呼ばれる。しかし、二語が反義語であるかは、容易に断定できず、視点によって異なる。池上（1975）によれば、反義語とその反義関係は少なくとも、(5) の3つの基準に基づいて区別できる。

- (5) a. 相補性：二語は相互矛盾する二項から成り立ち、同次元で対立し、一方の否定が多方の肯定を含意するペアである。すなわち、二項間は、連続しておらず、明確に独立している。例：男 - 女、表 - 裏、前 - 後、内 - 外など。
- b. 段階性：二項が連続して明確な境界線がない関係である。ある基準から見て、ある程度一方の極に近い部分と多方の極に近い部分の名称が選ばれてペアとして用いられる。例：大きい - 小さい、高い - 低い、善 - 悪、黒 - 白など。
- c. 方向性：「行く - 来る、売る - 買う、教える - 習う、着る - 脱ぐ、結ぶ - ほどく」などのような方向性または、視点が逆転している関係で、「换位関係」として扱われている。この换位関係にある表現は基本的には「行く - 来る」という対立に還元できるという。（池上 1975：299-300）

池上（1975）の分類によれば、相補性を持つ反義語は Horn（1989）の矛盾関係と同じだと考えられる。「正・誤」のような二語では、互いを否定し合い、同時に存在することはない。一方、「大きい・小さい」など、段階性をもつ反義語は、相互矛盾しないため、Horn（1989）による対立関係にあたると思われる。「大きくない」と否定することが、必ずしも「小さい」を表すわけではないためである。この反義語両者は連続しており、中間が存在する。また、この中間は反義語が所属している範疇によって、その価値の表示が異なる。この点に関して、Cruse（1986）は、Antonyms（段階的反義語）の内部を以下のように細分化している。

- (6) a. Polar Antonyms（極性反義語）：*Long-Short, Deep-Shallow, Wide-Narrow* など、両語とも疑似比較級である。
- b. Overlapping Antonyms（部分重複反義語）：*Good-Bad, Pretty-Plain, Kind-Cruel* など、どちらか一語が疑似比較級である。
- c. Equipollent Antonyms（等価反義語）：*Hot-Cold, Happy-Sad, Nice-Nasty* など、両語とも真性比較級である。（Cruse 1986：197）

このように、段階性のある反義語は、直感的に、意味が最大限に離れていると感じられるが、実は、両者の価値が多項のあるスケールに属される。そのため、反義語は意味の共通点が認められる語の間に成立する関係を尺度で表せるが、一つの次元では両極端にあり、他の次元では同じであるという逆の性質を持っている。その際、一般的には尺度の比較的高い方を指す項が尺度全体を指す。

そして、Croft&Cruse（2004）は Antonymy に対して、Monoscalar（長い・短い）と、Biscalar の Disjunct Equipollent（熱い・冷たい）、Parallel Equipollent（硬い・柔らかい）、Overlapping（良い・悪い）の概念を導入し、反義語をスケールで表示することを提起した。チャン（2022）

によれば、「無」ではじまる二字漢語には《多い》や《少ない》といった意味特徴があり、そこから、《甚だしい》、さらには、「良い」、「良くない」といった程度評価が成立する。そして、チャン(2022)はCroft&Cruse(2004)のスケールシステムを踏まえて、図1のように、量的スケールと質的スケールを設定することで、「無」の意味特徴、「無」の価値を体系的にとらえ、量から質へと転化するプロセスを説明できるようにした。

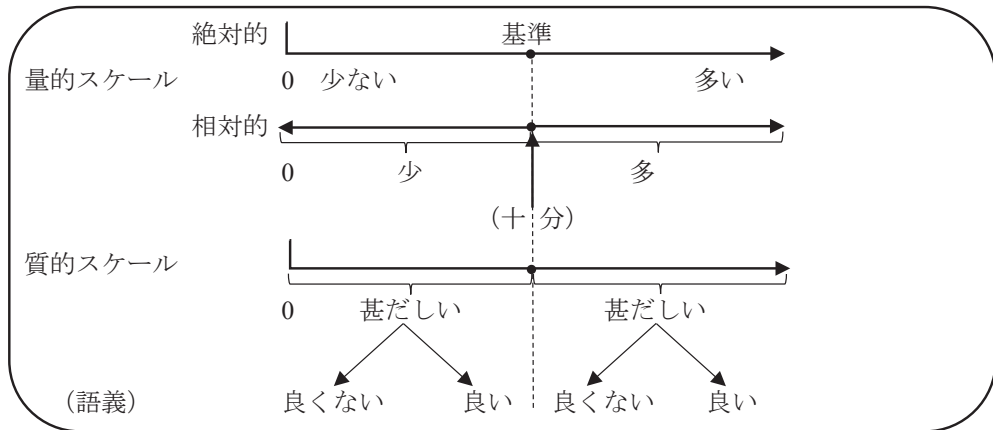


図1 「無」における量的スケールと質的スケール

(チャン 2022 : 190-192)

「無」ではじまる二字漢語は、「有・無」の対立関係によって、その反義語との間に、矛盾関係の相補性を持っているが、「不」と同じく対立関係の段階性を持っている場合もある。なぜなら、「無」は「多・少」「良・悪」の連続的な価値を示しているからである。もちろん、「無」は原義で「ない」を意味するように、量的スケールで「0」に相当するが、「少ない」価値を表す範囲に隣接するため、Langacker(1999:Ch.6)の参照点能力の理論によれば、「無」が「少ない」を示す可能性がある(Tran 2023a)。さらに、「無X」の反義語は「多」で示さなくても、「無視 - 重視、無学 - 博学、無謀 - 深謀、無味 - 好味、無欲 - 食欲」などのように「多い」の意味を読み取れる。有光(2011)によると、存在の有無を表す対比は根本的な対比であり、あるスケールにおいてグレディエンス的に存在の量の多さを表す「多い・少ない」から、大きさで見立てた場合の「大きい・小さい」、ある量を液体で見立てた場合の「深い・浅い」、重さで見立てた場合の「重い・軽い」、高さで見立てた場合の「高い・低い」、力の強さで見立てた場合の「強い・弱い」、広さで見立てた場合の「広い・狭い」など、更にそれが質感「良い・悪い」といった価値判断の高度に抽象的な方向の対比概念へと展開している(有光 2011 : 74)。このように、「無」ではじまる二字漢語とその反義語の関係は「ある」を前提に、「多少」すなわち量の多寡を表し、その量が他の対比関係へ発展したものであると考えられる。

3.2 「無」ではじまる二字漢語の反義語についての考察

「無」の意味、特に量的価値と質的価値を明確にするためには、まず「無」ではじまる二

字漢語の反義語を確認しなければならない。本稿では、『現代漢語例解辞典』（1998）を参考資料として、「無」ではじまる二字漢語の反義語を独自に選定した。選定基準は以下の通りである。

- ① 反義語が「有」ではじまる漢語である語を「有 X」タイプとする。
- ② 「有」以外の要素で構成される反義語を PX と称し、そのうち P が量的価値と質的価値のどちらを示すのかで更に分類する。量的価値を表す P は量の多さを示し、「多」の他に、「百、千、万」といった漢語要素もある。一方で、質的価値を表す P は人間の程度評価を示し、「至、絶、大」といった「甚だしい」の意を示す漢語要素である。
- ③ 「有 X」と「PX」以外の形で対応する反義語を、「X」タイプまたは例外とする。

上記の基準は、以下の3点において須山（1974）と大きく異なっている。一つ目は、「無」ではじまる二字漢語に対して、反意の表現より反義語の方に注目している。なぜなら、「無」ではじまる二字漢語のうち特別な意味を持つ語以外の多くは、基本的に「～がない」「～しない」と解釈され、特別な意味特徴を確認しにくいからである。二つ目は、「有」だけでなく、量的価値および質的価値を表す要素からはじまる「PX」にも注目している。量的 P と質的 P に注目することで、「無 X」の反義語が「有」ではじまっていなくても、「有」を基盤にしていることを証明するためである。三つ目は、X の内容や意味合いと反義語のタイプとの関係性にも着目している。特に、「X」が単独で反義語になる可能性を認め、X によって「無 X」と反義語が異なる反義関係を持つことを明らかにする。

このように、「無」ではじまる二字漢語 305 語のうち 185 語には反義語がある。本稿は、その反義語をタイプ別で表 2 に示す。これらの「無」ではじまる二字漢語には、そのすべてに反義語が存在しているわけではない。一方、一語に複数の反義語が存在しているものもある。「無 X」は、矛盾関係に基づく一つの反義語しか対応しないが、対立関係に基づくとその反義語は多数ある。次に、「無 X」の反義語は「有 X」、「PX」、「X」のどれかのタイプであるが、「有 X」のタイプが特に多い（110 語）。この「無 X」は主に実世界に存在している諸概念を表しているが、心的世界に関する語が少ない。ここでは、X の有無のみに注目しており、「無 X」と「有 X」に矛盾関係が成立している。一方で、「PX」タイプを採用しうる語の数も少なくない（合計 93 語）。その際、X が心的世界に関するため、X の「有・無」よりも、X の「多・少」（量的価値）と「良・悪」（質的価値）を表す。つまり、「無 X」と「PX」の間に、矛盾関係ではなく、対立関係が確認される。その際、「無 X」では、特殊な意味「少ない」と「悪い」が確認されることが多い。しかし、「無 X」には「多い」（無数 - 有数、無量 - 小量/微量）、「良い」（無瑕 - 微瑕）という意味が確認される例外もある。最後に、「無 X」の反義語には、「X」タイプが 25 語ある。「無礼 - 礼」と「無粋 - 粋」を除けば、「X」の内容が良くないため、「無 X」と「X」は矛盾関係を持っていると思われる。だが、心的世界のある「X」は、括弧の中に「PX」もあるため、「無 X」と対立関係も持っていると考えられる。このように、X は「無 X」と反義語との関係を決定する要因となると考えられる。

表2 「無」ではじまる二字漢語の反義語

「有X」 (110 語)		「有X」 ¹ 、「PX」 (43 語)		「有X」ではない (75 語)	
「有X」 (67 語)		P が量的要素 (16 語)	P が質的要素 (27 語)	P が量的要素 (19 語)	P が質的要素 (31 語)
無位 - 有位、無意 - 有意、無印 - 有印、 無因 - 有因、無塩 - 有塩、無煙 - 有煙、 無鉛 - 有鉛、無音 - 有音、無涯 - 有涯、 無盡 - 有盡、無格 - 有格、無官 - 有官、 有期 - 無期、無機 - 有機、無給 - 有給、 無窮 - 有窮、無業 - 有業、無卦 - 有卦、 無形 - 有形、無見 - 有見、有限 - 無限、 無簧 - 有簧、無孔 - 有孔、無光 - 有光、 無作 - 有作、無妻 - 有妻、無罪 - 有罪、 無財 - 有財、無産 - 有産、無翅 - 有翅、 無爵 - 有爵、無住 - 有住、無宿 - 有宿、 無性 - 有性、無償 - 有償、無床 - 有床、 無職 - 有職、無人 - 有人、無髓 - 有髓、 無声 - 有声、無生 - 有生、無性 - 有性、 無責 - 有責、無線 - 有線、無髻 - 有髻、 無窓 - 有窓、無相 - 有相、無象 - 有象、 無想 - 有想、無袋 - 有袋、無段 - 有段、 無畜 - 有畜、無微 - 有微、無底 - 有底、 無頭 - 有頭、無糖 - 有糖、無配 - 有配、 無標 - 有標、無品 - 有品、無文 - 有文、 無紋 - 有紋、無門 - 有門、無余 - 有余、 無料 - 有料、無隣 - 有隣、無漏 - 有漏。	無事 - 多事/殘事 無勢 - 多勢/豪勢 無感 - 多感/敏感 無言 - 多言/過言 無才 - 多才/奇才 無識 - 多識/良識 無情 - 多情/厚情 無色 - 多色 無調 - 多調/複調 無力 - 多力/強力 無福 - 多福/至福 無用 - 多用/重用 無生 - 多生 無神 - 汎神 無害 - 百害/陰害 無權 - 全權/實權	無興 - 逸興/余興 無功 - 奇功 無道 - 常道 無愛 - 最愛 無益 - 利益/巨益 無縁 - 近縁/良縁 無位 - 栄位/高位 無学 - 博学/碩学 無行 - 德行/善行 無効 - 神効/特効 無臭 - 惡臭/激臭 無常 - 恒常/定常 無心 - 恒心/慈心 無税 - 重税/血税 無想 - 妄想/空想 無体 - 具体/本体 無痛 - 激痛/絶痛 無道 - 正道 無毒 - 猛毒 無念 - 残念 無能 - 万能/堪能 無望 - 好望/熱望 無名 - 高名/威名 無理 - 合理/至理 無効 - 大効/神効 無知 - 大知/英知 無德 - 大德/高德	無尿 - 多尿/頻尿 無乳 - 多乳 無病 - 多病/万病 無毛 - 多毛 無汗 - 多汗 無食 - 多食/過食 無芸 - 多芸/奇芸 無作 - 多作/豐作 無人 - 万人 無障 - 万障 無策 - 万策/得策 無雪 - 豪雪 無資 - 巨資 無熱 - 高熱 無霜 - 大霜/繁霜 無敗 - 全敗/連敗 無累 - 煩累/連累 例外： 無量 - 小量/微量 無瑕 - 微瑕	無骨 - 仙骨 無似 - 近似/酷似 無頼 - 聊頼/信頼 無逸 - 安逸 無覺 - 正覺 無眼 - 慧眼 無義 - 大義 無景 - 絶景/勝景 無月 - 名月/明月 無視 - 重視 無術 - 奇術/上術 無節 - 盛節 無恥 - 廉恥 無善 - 至善/最善 無腸 - 剛腸/石腸 無筆 - 達筆 無法 - 作法 無謀 - 深謀/奇謀 無味 - 珍味/好味 無明 - 賢明/分明 無正 - 正氣/元氣 無雅 - 優雅/高雅 無願 - 大願/切願 無器 - 大器 無役 - 大役/重役 無愧 - 慙愧/羞愧 無厭 - 倦厭 無迷 - 迷妄/虛妄 無着 - 愛着/固着 無憂 - 大憂/深憂	「X」 (「PX」) (25 語) 無粋 - 私 無礼 - 欠 無私 - 動 無欠 - 異 無動 - 異 無異 - 難 無難 - 難 無垢 - 垢 無偽 - 偽 無惡 - 惡 無異 - 異 無難 - 難 無苦 - 苦 無乱 - 乱 無罰 - 罰 無精 - 精 無我 - 我 無惑 - 惑 無美 - 美 無戒 - 戒 無執 - 執 無欲 - 欲 無有 - 有 無信 - 信 無念 - 念

例外：無数 - 有数

4. 分析

Tran (2023b) は (7) のように、「無」ではじまる二字漢語 305 語を研究対象とし、6 グループに分類した。

- (7) A1 (101 語) : 無医、無音、無蓋、無機、無罪、無償、無糖、無病、無料など。
- A2 (58 語) : 無位、無季、無給、無根、無産、無実、無職、無断、無賃、無品など。
- B1 (26 語) : 無期、無窮、無疆、無境、無極、無限、無数、無量、無価など。
- B2 (6 語) : 無算、無尽、無双、無対、無比、無慮。
- C1 (71 語) : 無精、無粋、無道、無頼、無礼、無愛、無援、無縁、無雅、無学など。
- C2 (39 語) : 無異、無難、無念、無悪、無為、無我、無願、無偽、無苦、無垢など。

A グループは、語基が実世界に存在している概念に言及し、「無」と結合すると、その存在が否定される。だが、語基の性質は「その存在が人間にとって望ましいかどうか」によって、さらに分類できる。具体的に、A1 (無医=医者 that 常住しないこと) では、単に不在を表す語であるが、A2 (無給=給料をもらわないこと) では、欠如している語である。そのため、A2 は「望ましくない」意味合いを持つ。B グループは、語基の概念は否定されても、逆に「甚だしさ」を表す。B1 では、語基が表す刑而上学 (主に時間、空間、量) が「無」で否定されている。B2 では、語基が主に「比較する、計算する」といった行為性を示す。その際、「無」で否定されると、「一番、最も」を意味するようになり、良い意味をもっている。C グループでは、認知言語学の容器スキーマで分析し、語基の概念を容器の「Full-Empty」の対比によって説明した。このように、「存在する」を前提とした C の内部は、語基の意味合いが良い場合、語義がマイナス的な意味を持つ C1 になり、語基の意味合いが良くない場合、語義がマイナス的ではない意味を持つ C2 になる。第 4 節では、「無」ではじまる二字漢語の分類に基づいて、「無」と「有」との関係、そして「無」の特殊的意味特徴についてさらに深く考察する。

4.1 「無」ではじまる二字漢語とその反義語 — 「有」ではじまる二字漢語—

Tran (2023b) によると、「無」は、語基が示している概念・対象・行為の欠如を表すということが重要である。「有」で対応されていない語基も、その存在性がないというわけではなく、「有」で表記しなくても、後ろの語基が示している指示対象の存在を確認できる。このように、「有」と「無」は存在性の有無を表す点で非対称性を示している。本稿はこの「無」と「有」の非対称性を明確にするために、「有」ではじまる二字漢語を統計し、「無」ではじまる二字漢語と対応する割合を通じて検討する。まず、本稿では日本語における「有」ではじまる二字漢語が 163 語あることが確認できた。(8) はその一部である。

- (8) a. 有興 (人)、有功、有事、有勢、有道、有念、有愛、有位、有為、有意、有因、有無、有益、有塩 (バター)、有煙 (炭)、有縁、有鉛、有音、有害、有涯、有蓋、有格 (社)、有学、有官、有感、有期、有機、有義 (波)、有給、有窮、有業など

b. 有界、有驗、有待、有髮、有閑、有勲、有刺、有志、有史、有夫、有半など
(8a) は語基が「無」と「有」に結合できる。(8b) はそうではない。このように、「無」ではじまる二字漢語の全体で、その語基が「有」と結合できるのは、305 語のうち 110 語ある (36.1%)。一方で、「有」ではじまる二字漢語 163 語で、語基が「無」と結合できる語の数は 125 語あり、全体の 76.7% と高い割合を占めている。このように、「無」と「有」は意味で対立しているが、漢語を構成する役割で非対称性を示している。

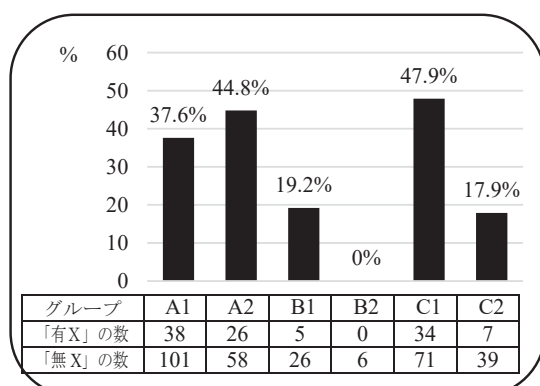


図2 「無X」に「有」が対応する割合

図2 から見ると、「無」ではじまる二字漢語に対して、「有」が対応する割合は高くない。「無」ではじまる二字漢語の各グループのうち、「有」が対応する割合が最も高いのはC1の47.9%、次にA2の44.8%、A1の37.6%、B1の19.2%、C2の17.9%、最後にB2の0%となっている。また、A、B、C全体における「有X」の割合は、Aが40.3% (64語/159語) と最も高く、その次にCの37.3% (41語/110語)、Bの5.6% (5語/32語) と続く。

本稿は、有標性 (Markedness) という概念を援用することで、この「無」と「有」の語基結合の非対称性を説明する。具体的に、ある言語項目について、特定の性質が認められる場合には有標 (Marked) とし、認められない場合には無標 (Unmarked) とされる (Hofmann 1993: 21)。このように、「無」の使用は「存在性」の欠如を述べるという点で、「有標性」の特徴を持っていると考えられる。その際、「無」は「いつも存在している状態」と異なることを訴え、語義全体で「不在、欠如」の意を後ろの語基に添えている。言い換えると、「無」は、語基の概念が「ある」という前提に反し、特別な「欠如」をマークしている。もちろん、(8b) のように「有」ではじまる二字漢語であっても語基が「無」と結合できない語もある。ここでは、「有」は「普段はない」状態を前提とし、「ある」という特別な事情をマークする考えられる。例えば、「有権者」は選挙において投票する権利をもつ者をいうが、「無権者」は存在しない。かつて一般人は政治に参加する権利を認められていなかったから、選挙制度を導入したことで、投票ができるようになり、「有権」という語で前の状態である「ない」と区別するようになったのであろう。その際、「ない」を前提にするため、「有」が有標性を持つ。つまり、「無」と「有」のどちらが「無標性」、「有標性」を示しているかは決まっていない。それぞれの前提が「存在」か「非存在」かによって異なる。

「無」と「有」ではじまる二字漢語を無標性・有標性の観点からみることで、人間が存在の世界をどのように認知しているかがわかってきた。「無」は、人間が想定している「存在」が現実で欠けていることを示している。有標性を持つモノはいつも特別な事情を示している。例えば、「2」は何の記号をつけなくても、実数の2と認識されているが、その反対の

「-2」は必ずマイナス記号「-」を付けないと、負数の2と認識されない。「無」はこのマイナスの記号のように、存在の欠如を表すために必要不可欠である。一方で、実数の「2」はあえて「+2」と表示する必要がない。むしろ、「+2」と表示すると、異なる意味を示す可能性がある。例えば、「+2」は、気温で言えば、いつも氷点下の環境下において、暖かい「2°」と意味する。だが、夏で、その日は前日の気温と比べて「2°」高いことをも意味する。この「+」記号の使用は「有」の役割と似ていると考えられる。「有識者」が「広く物事を知っている人」を意味しているように、「有識」は意味で「博識」と似ている。ここでは、「有」は単に「ある」を指すのではなく、「優れている」という特別な状態を意味している。

要するに、「無」は、その存在が確認できない場合に語基の前に付けられ、その「不在、欠如」を意味する。一方、「有」は特別な存在を強調する場合に限って使われるが、常に「存在」を表す必要がない。このように、「無」ではじまる二字漢語の数が「有」ではじまる二字漢語より多い理由は、語基が表す存在性を述べる際には、必ずしも「有」を使うわけではないが、存在性の欠如を表す際には「無」で表す必要があるためであると考えられる。これは、「無」と「有」の非対称性といい、存在の有無を表す際の「無」または「有」を付加する必要性の有無によって生じる。この非対称性を通じて「無」の本質は「ある、存在する」いわゆる「有」を前提にしていることも明らかになった。また、「無」から「有」へ認知するというのは、我々が実世界から心的世界まで「存在している」のほうに注目していることを示唆していると考えられる。

4.2 「無」の特殊的な意味特徴について ―スケールシステムをグループ別に見る―

チャン (2022) は図1のように「無」ではじまる二字漢語の特殊な意味特徴をスケールシステムで検討した。しかし、これは「無」ではじまる二字漢語の一部のみを分析した結果だと思われる。チャン (2022) の図1には2つの課題がある。一つ目は、特別な意味を発生しない「無」ではじまる二字漢語（無給、無職など）に対して、量的価値を表さないものの、マイナス的なニュアンス、つまり質的価値を表すことを説明できなかった。二つ目は、量的価値を表す場合、Tran (2023b) の分析によると、「多い」はBで発生し、「少ない」はCそれぞれ自体に存在しているように、この「多・少」の対立は連続していない。また、「良くない」はC1で顕著であるが、その反対とみられるC2は「良い」ではなく、「悪くない」を意味している。この課題を解決するために、この節では、各グループにそって「無」における量的スケールと質的スケールを再検討する。

まず、「無」ではじまる二字漢語であればどの語でも量的価値があるというわけではないと考えられる。Aグループでは、「無」が語基の存在を否定するため、「無X」は「Xがない」を意味し、量的スケールで示せば、原点「0」に一致している。一方、「有X」が文字通り「Xがある」を意味しているため、「無X」と「有X」は相互矛盾し、反義語としての相補性を持つ。一方で、BグループとCグループでは「無X」が量的価値をもち、段階性を持つ量的

スケールでその価値を次のように確認できた。B グループでは、「無限」、「無双」のような「無 X」の位置は A グループと正反対であり、語の量的価値が終点にある。そのため、「無 X」は「X」の最高の状態に相当する。言い換えると、「無 X」は存在範疇(ある)に所属し、無限大に位置している。また、語義は「長い(無期など)、広い(無辺など)」を示しても、その長さ、広さは量で示すと、「多い」に帰される。そのため、B グループの「無 X」は量的価値があり、「多い」の意味特徴を発生している。その際、「有 X」が反義語として存在したら、スケールのどこかで、規準(S-Standard)の設置が必要となる。「有 X」は量的価値が「0~S」である。また、「無 X」と「有 X」は「X」の範疇で対立しているが、両者は連続して、段階性を持つ反義語だと思われる。C グループでは、「無礼」、「無難」のように「無 X」が「～がない」と解釈されるため、A グループと同じく、「無 X」と「有 X」が矛盾関係の相補性を持っていると思われる。だが、Tran (2023b) によれば、C グループの特徴は、人間の心的世界を言及するため、「無 X」は「X がない」というわけではない。ある基準に達しないと、「X」にならないと思われる。実際、容器性をもっている C の「無 X」は「絶対ない」よりも基準(S)に比べて「少ない、足りない」を意味している。その際、「無 X」の量的価値は「0~S」の範囲で移動している。しかし、「無難-多難」のように、量的価値を表す P からなる反義語「PX」が存在する(図3の点線の矢印部分)場合、S が「無 X」と「PX」の境界になり、その際、「PX」の量的価値は「多い」を意味している。一方で、「無礼・礼」のように、量的価値ではなく、質的価値を表す P からなる「PX」が存在する場合は S が「無限大」に位置するため、規準(S)に達することが難しい。

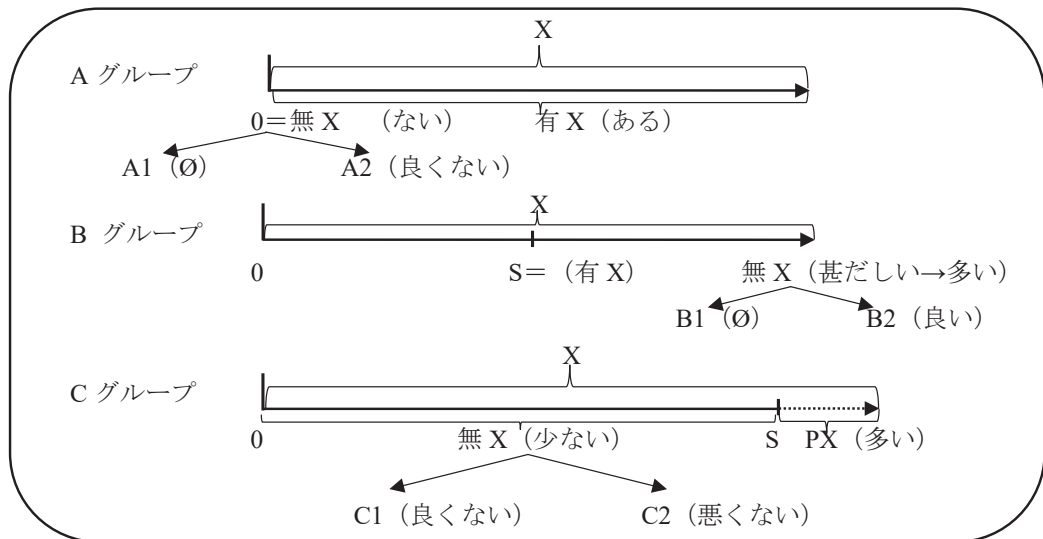


図3 「無」ではじまる二字漢語のグループ別の量的スケールと質的スケール

「無」ではじまる二字漢語の量的スケールについて、X の価値が「0」から「無限大」まで続く。場合によって「無 X」の価値が変わるため、「無」の意味も変わる。A グループでは「無 X」の基本的な価値を示し、「無 X」の意味は「ない」である。B グループでは、「無 X」

の意味は「ある」の「多い」価値を発生している。C グループでは、「無 X」の意味は「ある」の「少ない」価値を示している。

次に、質的価値については、「無」の価値がグループによって異なる。Tran (2023b) によれば、「無」ではじまる二字漢語の価値は、「無」自体ではなく、後ろの語基のほうが強い影響を与えている。または文脈に依存している。A1 では、量的価値がないため、質的価値への転化がない (Ø) と思われる。しかし、A2 の X は「人間にとって望ましい」から、「X がないと、良くない」意味合いを示している。それは単純な「有無」の対比から生まれる意味合いだと思われる。B グループでは、「甚だしい」の特殊な意味として、場合によって量的価値「多い」が発生している。質的価値に関して、B1 では、文脈によって「良い」にも「良くない」にもなりうるが、語だけでは良し悪しを判断できない (Ø)。B2 では、語義が「一番、最も」を意味しているため、「甚だしい」が「良い」に発展している。C グループ、特に C1 グループは、A、B と比べて量的から質的への転化が著しい。C1 では、X が良い意味合いを持っているため、量的価値が「少なければ少ないほど」語義が「良くない」と評価されている。これは「MORE IS GOOD, LESS IS BAD」というメタファー概念の「LESS IS BAD」を忠実に反映している。しかし、C2 では X の意味合いが良くないため、「少ない方が良い」と思われるが、語義は「悪くない」である。このように、「MORE IS GOOD, LESS IS BAD」の「LESS IS BAD」は C2 のように、いつも正しいとは言えない。「無難」は、危険性が少ないが、完全になくなるとは言えない。Tran (2023b) では「無難」では、危険の潜在性がまだ残るため、人間の認知では「安全」だと意味しているが、「良い」にならないと説明された。

このように、スケールシステムをグループ別に採用したことは、「無 X」とその反義語との関係だけでなく、チャン (2022) が指摘した特殊的な意味特徴を更に明らかにできた。具体的に、「無」の量的価値と質的価値はどの語にも存在しているというわけでない。各グループに分けることで、量的価値は《多い》と《少ない》があるものの、同一のグループに所属していない。質的価値「良い」と「良くない」も別々に存在している。なお、「無価」が「はかり切れないほど貴重だ」を意味しているように、「無」の「多い」や「良い」といった特殊な意味は、新たに派生して語義に定着したものであることが分かった。このように、「無」の特殊な価値は《少ない》、そして「良くない」のほうが顕著だと結論付けられる。

4.3 「無」と「有」、そして「空」にかかわる関係性

矛盾関係を持つ「有」と「無」は、必ず対立するように思われるが、「無」ではじまる二字漢語とその反義語から見れば、そうとは限らない。特に、「無」は「ある (有)」を示せる場合があり、共存しうる。そのため、「無」と「有」の相関関係を見直すことが必要である。

「無」は「存在の否定・欠如」の他に、「一切の有無の対立を超え、それらの存立の基盤となる絶対的な無」も意味している (有光 2013 : 162)。前者の解釈は「無」ではじまる二字漢語で確認されるが、後者は、意味的に「存在」の起源であり、「有」と絶対的に対立し、

矛盾関係でいえば「絶対無」または「非有」という状態であろう。この「絶対無」とは、存在論を超え、思考上の産物で、主に宗教・思想で取り上げられる概念である。つまり、「絶対無」は現実には存在しないように見える。そのため、日本語における「無」は存在論の立場にたち、「存在」を前提とした上で、「存在の欠如」を表す要素だと考えられる。

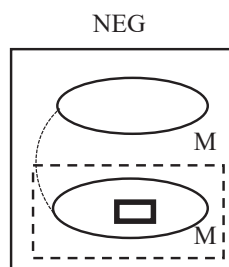


図4 否定の認知図式
(Langacker 1991 : 134)

Langacker (1991) は否定について論じた際、図4のように、否定の空間を二つのメンタルスペースによって示し、否定は対象 (■) が、ある空間 (M) から外に出されたものであると述べている。つまり、否定は存在と非存在の対比によって成立し、その両方の対比の認識こそが否定の表現である。つまり、「ある空間」が存在しなければ、否定が表現できないことを示唆している。所与の対象は特定の空間に限って見ればその存在が欠如しているが、全景で見ればそれを再確認できる。「無」が「絶対無」ではなく、「ある」の意を表せることは、

Langacker (1991) の否定理論とも一致する (チャン 2022 : 195)。このように、「無」の本質は「存在」を前提にしていることが明らかになっている。しかし、M という認知空間に所与対照が確認できない場合はどのような形で人間が把握しているのであろうか。それは「空」だと思われる。「空」は「空中」「空間」といった物理的描写のみで価値的要素が少ないが、(9) のような語を構成することが多い。

- (9) a. 空位、空虚、空隙、空室、空車、空射、空席、空腹、空乏、空房、空砲など。
b. 空言、空語、空説、空想、空談、空転、空文、空名、空理、空論、空費など。
c. 空有、空界、空階、空画、空観、空教、空華、空見、空劫、空寂、空宗など。

(9a) では「空」は「中身はない」を意味している。「空席」は「人がいない席。空いている席」を意味し、「空腹」は「腹が減ること」を意味している。(9b) では「空」は「内実を伴わない」を意味し、「空論」は「役に立たない議論や理論」を意味し、「空費」は「費用・時間などを無駄に使うこと」を意味している。このように、「空」は現実で存在しても、人間の心的世界で「ない」と見なされている。(9c) では、仏教、禅の言葉として、「実体・本質のないこと」を意味しているように、「空」は「有」と「無」を併せた存在である。この

ように、「空」は必ず特定の空間、蓋がある空間を求め、それ自身の容器性を示す。

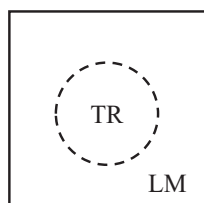


図5 「空」の容器性

有光 (2013) によれば、「空」は文字通り、「開けたら、空っぽだ」を意味するため、容器性がある空間では、その「容器」自体は {Landmark (LM)} として、存在すべきモノ {Trajector (TR)} がその容器に確認できない (図5を参照する)。また、「空」は本来存在してほしいような望ましいモノ (点線の円) がないこと

や、何らかの容器性の感じられる中に本来存在していると予測期待がされているようなモノ

ノが予測期待に反して存在していないことなどを表す（有光 2013：173）。このように、「空」は「有る・無い」という側面に注目しているため、意味的縛りがあり、「無」と比べて生産性や拡張性が弱いと考えられる。

「空」と同じく、「無 X」は仏教に由来した語が多い。（10a）では、「無」が「ないほうが良い」を意味するが、（10b）では「多い」と「良い」の特別な意味を示している。

- （10） a. 無我（自我をなくすこと）、無垢（煩惱を離れて、汚れがないこと）、無雑（余計なものが全く混じっていないこと）、無想（俗事などを何も考えないこと）、無念（余計な事を何も考えないこと）、無執（執着のないこと）
b. 無学（真理を尽くし、もはや学ぶ必要がないこと）

（10）では、仏教に由来した「無 X」は「なくなる、なくなった」を意味している。また、表2で示しているように、反義語が「X」であり、人間にとって良くない。仏教では、この世は俗事、自我、執着など、いわゆる煩惱が多くて人間に苦しみと迷いをもたらす根本である。人間はその煩惱を自ら克服し、苦悩を抜け出たら、「無」という最高の状態に達する（有光 201:168）。そのため、「無」が図6のように、量的価値が「0」に戻っても、意味は良い。

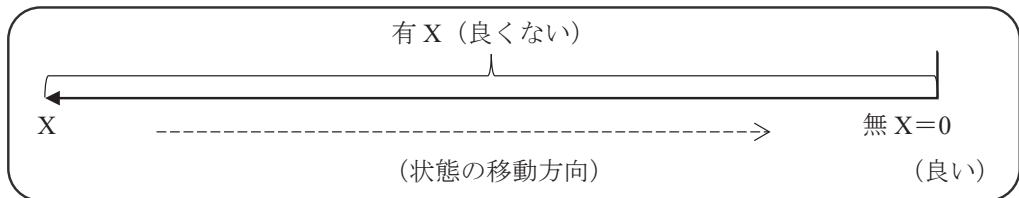


図6 仏教に由来した「無 X」の量的スケール

実際、「無 X」という状態は達成しにくいいため、我々は現実の煩惱に囲まれても、精神ですべてを「ない」と見なす。それを、「空」という。「空」は仏語で「万物はすべて因縁によって起こる仮の相で、実体がない」と意味しているように、「空」は、「有」でありながらも「無」であると理解される。「有」は「空」の表面であり、「無」は「空」の中身を表している。「有」と「無」は存在と非存在の対比を維持するが、両者は「空」を構成しているため、「空」と対照している。「無」や「空」の捉え方は、何かモノが「有る」以上に、世界の見方そのものであり、「有る」「無い」の二項対立を超えた上位概念に気付く視点が必要である（有光 2013:169）。その視点は、「有る」「無い」を統合し全体を構成している、とらわれのない視点である。それがより上位の「有る」であり、同時に「空」なのではないかと考える。

有	
無	空

図7

空	
無	有

図8

図7のように、普段我々は「何もない」のではなく、「何かがある」と考え事態を把握するが、「無」と「空」を混同しがちである。その原因は、両者が「有」と対立しているからである。実際には、図8のように、「無」と「有」の対立の上に、二項対立的視点を超えた「空」という新しい世界観を構成していると考えられる。

5. まとめ

本稿では、「無」ではじまる二字漢語をその反義語と対照し、「無」の意味を再検討した。その結果は、次の3点にまとめられる。一つ目は、「無」は二字漢語を構成する際、後ろの語基と意味で反義関係が成立する。だが、その関係は矛盾的なものに限らず、量的または質的価値を表す要素ではじまる反義語がある場合、対立的な関係を有し、量的スケールで表示できる。二つ目は、「無」の特殊な意味、「多い・少ない」と「良い・良くない」は「無」ではじまる二字漢語に確認されるが、偶発的にセットとなる。「少ない」と「良くない」は「無」それ自体の意味であり、「多い」と「良い」は使用上で発生した意味として、現在「無」ではじまる二字漢語の一部に定着している。三つ目は、「無」は人間が「全く存在しない」という絶対的意味ではなく、相対的に把握しているため、「欠如している」を意味している。つまり、「無」は、「有」を前提にし、現実と認知での対比によって生まれ、「不在、欠如」として理解される。そして、「無」がその反対の「有」と共に、「空」を構築していると思われる東洋思想から見れば、「無」は意味の面で拡張性に富んでいると結論することができる。

参考文献

- 有光奈美(2011)『日・英語の対比表現と否定のメカニズムー認知言語学と語用論の接点ー』、開拓社。
- 有光奈美(2013)「「無」と「空」の関連表現と広告表現における“fill the void”の位置付けー John Cage「4分33秒」の世界観との接点ー」『経営論集』(81)、pp.161-177。
- 池上嘉彦(1975)『意味論』、大修館書店。
- 北原保雄、東郷義男(編)(1989)『反対語対照語辞典』、東京堂出版。
- 須山奈保子(1974)「「不」「無」接辞をめぐる」『学習院大学国語国文学会誌』17、pp.19-28。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(2002)『日本国語大辞典』第二版、小学館。
- チャン クォック ヒエップ(2022)「日本語における「無」の意味についての研究ー「無」ではじまる二字漢語を中心にー」『日本語・日本文化研究』(32)、pp.182-196。
- Tran Quoc Hiep(2023a)「「無」ではじまる混種語の意味についての研究ーメトニミーを中心にー」(第43回日本語日本文化教育研究会口頭発表、2023年3月11日)。
- Tran Quoc Hiep(2023b)「日本語における「無」ではじまる二字漢語の分類ー「無」と結合する語基に基づいてー」(第44回日本語日本文化教育研究会口頭発表、2023年7月1日)。
- 林太(監修)(1998)『現代漢語例解辞典〈二色刷〉』第三刷発行、小学館。
- Croft, William and D. Alan Cruse(2004) *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press.
- Cruse, Alan, D.(1986) *Lexical Semantics*, Cambridge University Press.
- Horn, Laurence R.(1989) *A Natural History of Negation*, University of Chicago.
- Langacker, Ronald W.(1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.2, Stanford University Press.
- Thomas R. Hofmann(1993) *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics*, Longman.
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

¹文字数の制限があるため、ここでは「有 X」を省略し、「PX」のみ記載する。